「約束のリバイバル・シネマ」

荒木　勇人

第 49 回創作テレビドラマ大賞 1 次/第 47 回シナリオ S1 グランプリ 3 次通過

あらすじ

大学進学を機に一人暮らしを始め、実家の父・久作（４８）と疎遠になった映画好きの大学生・椎名晋作（２０）は、幼い頃に父と交わした「毎週金曜は映画の日」という約束を守り続け、今でも金曜日には友人の東康平（２０）とレンタルビデオ店に足を運び映画を観ることを習慣にしていた。

ある金曜日。いつものようにビデオ店を訪れた晋作は、自分の好きな映画だけが軒並みレンタル済みになっていることに気が付く。

しかし、その後も一向に返却される気配がないことを不審に思った晋作は、東とレンタルしている人物を突き止めようとするが…。

映画が繋いだ、小さな奇跡の物語。

登場人物

椎名　晋作（６）　（２０）　大学生
東　康平（２０）　大学生
石田　剛志（２０）　大学生
椎名　久作（１８）　（４８）　晋作の父
小川　渚（２０）　大学生
小川　遥（１８）　（４８）　渚の母
上野　美夕（２２）　ビデオ店店員

○椎名家・リビング（回想・夜）

１４年前。

椎名久作（３４）がラージフィッシュとタイトルの書かれた映画のＤＶＤをプレーヤーに入れてソファに腰掛ける。

久作「晋作～、始まるぞ～」

と、自室にいる晋作に呼びかける。

椎名晋作（６）、久作の元に駆け寄り隣に座る。

晋作「パパ、今日のはなんて映画？」

興奮に満ちた眼差しで問いかける。

久作「ラージフィッシュ」

晋作「…また昔の映画？」

と、少しガッカリとした表情。

久作「晋作が生まれた年の映画だ、まだ十分新しい作品だよ。それに昔の映画がなきゃお前の好きな今の映画だって生まれてないかもしれないんだぞ？」

晋作「どんな映画なの？」

久作「う～ん、そうだな」

久作、ＤＶＤケース裏面のあらすじに
目を通す。
久作「簡単に言うと…疎遠になった父と子の
和解をテーマにした作品だよ」
晋作「全然簡単じゃないよ！　疎遠って…？
和解って何？」
久作「そうだな、全然簡単じゃなかったな。
疎遠っていうのは、あんまり会わなくなる
ってこと。和解は…仲直り、って意味だ」
晋作「ふぅん…」
久作「ちょっと早かったかな？」
と、笑って誤魔化す。
晋作「なんで家族なのに会わなくなるの…？
ママとも疎遠ってこと…？」
久作「それは…」
晋作「僕はパパとも会えなくなっちゃうの」
今にも泣き出しそうな晋作の顔を見て
つられるように目を潤ませる久作。
久作「…おいで」
と、晋作を抱きしめて頬を寄せる。

久作「……」

晋作Ｎ「毎週金曜日は映画の日。それが父の口癖で、小さい頃から毎週金曜日には一緒に映画を観るのが恒例だった」

晋作「…パパ、髭痛い」

久作「…ごめんごめん」

と、目を軽く拭って晋作を離す。

前に向き直って映画を観る２人。

映画が放つ鮮やかな色彩に染められていく、晋作のワクワクとした顔。

（回想終わり）

○アパート・晋作の部屋（夜）

退屈そうに死んだ目で映画を観ている晋作（２０）の顔。

テレビには低予算Ｂ級サメ映画が映る。

隣で笑う、東康平（２０）。

晋作Ｎ「大学進学後に一人暮らしを始め、父とは疎遠になってしまったが…」

晋作「…面白いか？」

東　「当たり前じゃん、最高だよ」
　晋作、呆れた表情で東を見る。
晋作N「…今でも、毎週金曜日には欠かさずに映画を観る習慣を続けている」
　「俺はサメを自認している」と、次々に海水浴客を襲う人間の男（映画）。
晋作「……サメでもないじゃんか」
　痺れを切らして立ち上がり、ＤＶＤをプレーヤーから取り出す晋作。
　ディスクにアイ・アム・ザ・シャークとタイトルが書かれており、準新作のシールが貼られている。
東　「ちょっと」
晋作「こんなのを映画と呼ばない」
　と、ディスクの穴に通した人差し指を振りながら嫌味っぽく言う。
東　「…また始まった」
　東、溜息をついて頭を抱える。
　晋作、別のＤＶＤを再生する。
　テレビに古い名作映画が映る。

東　「うわ、出た。また古い映画？」
晋作「悪いか？」
東　「別に…悪くはないけどさ、毎週毎週は
　さすがにちょっと…」
晋作「仕方ないだろ、小ちゃい頃から…」
東　「（食い気味に）親父さんの影響ね」
晋作「…そう」
東　「そろそろ自分で面白い映画見つけなよ。
　最近の映画でも良いのいっぱいあんだし」
晋作「お前の言う最近の良い映画がこれか？
　っていうか、お前こそ変なＢ級映画借りる
　のいい加減やめろよ。Ｂどころじゃないぞ、
　Ｚ級！　しかも準新作！」
東　「…じゃ、この会は今日で解散しよう」
　と、立ち上がる。
晋作「ちょちょちょちょちょ…」
東　「？」
晋作「…分かったよ。ＢでもＺでもなんでも
　いいから、それだけは勘弁して」
　東、まだ不満そうに肩をすくめる。

晋作「はぁ…」

と、渋々アイ・アム・ザ・シャークを

ケースから取り出して再生し直す。

東、満足げに頷きソファに腰を下ろす。

晋作、その隣に座る。

東　「そんなに親父さんとの思い出が恋しい

なら、たまには実家帰れば？」

晋作「別に、そんなのじゃない」

東　「じゃあ何」

晋作「毎週続けてる習慣をやめるのが怖い」

東　「一人でも観れるじゃん」

晋作「分かってないなぁ。誰かと映画を観て、

感動を共有することに意味があるんだろ」

東　「…そろそろ恋人でも作ればいいのに」

晋作「うるさいなぁもう、黙って観てろよ」

東、しばらく沈黙して突然立ち上がる。

晋作、慌てて引き止めようとする。

東　「トイレ」

タイトル『約束のリバイバル・シネマ』

○レンタルビデオ店・外観（夜）

晋作N「事件は、ある金曜日に起こった」

東、店の前でしゃがんでいる。

店から出てくる晋作。

東　「遅いよ椎名、朝になるかと思った」

晋作「…なぁ東、ちょっと来て」

東　「も～何？　早く帰ろうよ」

晋作「いいから早く」

東、重い腰を上げる。

その背後には「閉店のお知らせ」との貼り紙がある。

○同・店内（夜）

晋作、棚の前に屈み空のケースを凝視している。

晋作「…ないんだよ、ほら」

東　「ほらって、何が」

晋作「俺の好きな映画が…全部！」

東　「椎名それはダメだ。流石にクレイジークレーマーすぎて擁護出来ない」

呆れた表情でその場を去ろうとする東を必死に引き止める晋作。

晋作「違うんだって。これもこれも、これもそれもあれも…全部ないんだよ」

と、棚に並んでいる空のケースを次々に指をさして言う。

東　「じゃあ、あれも？」

晋作「それも！」

東　「…おかしいじゃん」

晋作「おかしいだろ！？」

○大学・食堂

晋作と東、石田剛志（２０）がトレーを持って受け渡し口に並んでいる。

晋作「…ありがとうございます」

定食を受け取って席へと向かう晋作に後から２人がついていく。

東　「それで椎名が、俺の好きな映画が全部ない～って騒ぎ出してさぁ」

晋作「そんなマヌケな喋り方してない」

石田「あ、騒いではいたんだ」
晋作「まぁ、多少は」
席につく３人。
各々食事をし始める。
石田「それで、どうしたの」
晋作「どうしたもこうしたも、昨日は諦めて東セレクトのＢ級映画を２本。次の金曜日にまた見に行くつもり…」
石田「う～ん…。確かに、自分の好きな映画だけが全部借りられてるって変な話だね」
晋作「だろ？　一個あげちゃう」
と、石田のお皿に唐揚げを一個置く。
石田「よっしゃ～」
東　「いやいや俺も、石田が思ってる３倍は変だと思ってるけどね普通に」
東、さりげなく皿を前に出す。
晋作、東を薄目で睨む。
東　「えぇ…今の３個ゲットじゃないんだ」
晋作「それに、新作ならまだしも全部旧作。こんな偶然ありえる？」

石田「確かに、今はサブスク全盛期だしね」
東　「…店員さんが隠したんじゃないの？」
晋作「何の為にだよ…」
東　「だって椎名、嫌われてるじゃん」
石田「そうなの？」
晋作「（思い当たる節があるように笑って）
　…いやいや嫌われてないって。誰に対して
　もあんな感じなんだよ、あの人は…」
石田「そういう東こそ隠したんじゃないの」
東　「それこそ何の為にだよ」
晋作「俺が…昔の映画ばっか借りるから？」
東　「……その手があったか」
晋作「いや、ダメだよ！」

○レンタルビデオ店・店内（夜）
　晋作、中腰でＤＶＤを探している。
東　「椎名まだ？　俺ら１本ずつ借りたよ」
晋作「ない、今日もないぞ…」
　棚には空のケースが並んでいる。
晋作「ほんとにお前じゃないよな？」

東　「違うって。第一俺がそんなことしたら
営業妨害で捕まっちゃうよ」
晋作「それでもお前はやりそうなんだよ」
東　「どんな言いがかりだよ」
晋作「ちょっと俺聞いてくる、先出てて」
東　「はいよ」

○同・外観（夜）
東と石田、店の前にしゃがんでいる。
東　「…そういやここ、閉店するらしいよ」
石田「えっ、そうなの」
東　「うん、ここに書いてあった」
と、後ろの貼り紙を指す。
石田「時代の波には逆らえないね」
東　「閉店するから在庫処分でってパターン
もあると思うんだけど、椎名が閉店する事
知らなさそうだから言えないんだよねぇ」
石田「いいんじゃない？　言わなくてもいつ
かは知ることになるんだしさ…」
東　「それはどっちのいいんじゃない？」

石田「あ、言ってもいいんじゃない？の方」
東　「じゃ、言っちゃうか」
　晋作、店から出てくる。
　東、慌てて壁の張り紙を剥がして丸め
　ポケットに入れる。
石田「えぇ」
東　「どうだった？」
晋作「あぁ、まだレンタル中だってさ」
　東と石田、顔を見合わせる。
東　「レンタル中？」
晋作「そうなんだよ、どうにかしてよ～」
石田「俺にはどうにも出来ないけど…」
東　「借りてる人死んでんじゃないの？」
晋作「呪いのビデオじゃないんだから」
東　「延滞してるってこと？」
晋作「いや、一応返却はされてるらしい」
石田「尚更気持ち悪いねそれ」
東　「それで、今日はどうすんの」
晋作「仕方ない、今日はもう諦める。来週の
　金曜にまたリベンジしよう」

石田「なんでいつ返却されるか聞かずに毎週金曜に来ようとするの…？」

東　「ごめん、うちの椎名天然でさ」

晋作、恥ずかしげに頭を掻く。

東　「ま、古い映画は諦めろってことかな」

晋作「やっぱりお前なのか？」

東　「違うよ、神の思し召し」

晋作「ジーザス！　あぁあ…」

晋作の叫びと共に店の明かりが消灯。

石田「…帰れってさ」

○アパート・晋作の部屋（夜）

晋作と東、石田がテレビの前のソファに並んで座っている。

石田「本当に同じ人が借り続けてるのかな」

晋作「そうじゃないとおかしいよ、そうじゃなくてもおかしいけど…」

石田「でも、誰が何の為に」

晋作「さぁ…知ったこっちゃない。でも俺は絶対に犯人を突き止める」

東　「何、探偵ごっこ？」
晋作「そうでもしないと気が晴れないだろ」
東　「ま、面白そうだし付き合うよ」
晋作「どうも」
東　「そんなことより早く映画観よ」
　と、袋からＤＶＤを取り出して渡す。
　ディスクには、スゴイダーマン２との
　タイトルが書かれている。
晋作「…何だよスゴイダーマンって」
東　「ん？」
　と、ＤＶＤを手に取り確かめる。
東　「ホントだ、間違えた」
石田「しかも２（ツー）だ」
晋作「も～絶対わざとだろ」
東　「違うって、２だとは思わなかった」
晋作「スゴイダーマンはわざとじゃん！」

○レンタルビデオ店・レジ（夜）
晋作Ｎ「そして、次の週も」
　レジの前に立っている、晋作と東。

上野美夕（２２）が気怠そうに対応。

晋作「えぇ…まだ返ってきてないんですか？
もう３週間ぐらいずっとレンタル中なんで
どうにかなりませんか？」

上野「あぁ、はい…すみません」

上野、ガムを噛んでいる。

東、晋作を憐れみの目で見ている。

晋作「このＤＶＤ、いつも同じ人が借り続け
てますよね。その人、いつも何曜日の何時
頃に来るか分かりますか？」

上野「え、なんでそんなこと聞くんですか」

晋作「いや、それは…」

上野「ストーカー…？」

晋作「違いますよ～！　な？」

と、東に目配せ。

東　「いやぁ…（首を傾げ）」

○同・店内（夜）

晋作と東、歩きながら空のケースを棚
に戻しながら話している。

東　「そりゃ、あんな聞き方怪しまれるよ」
晋作「じゃあなんて言えばよかったんだよ」
東　「それはだから…このＤＶＤ…借りてる人…いつも何曜日の何時頃に…」
晋作「一緒じゃねぇか」
東　「あ、そういやさっき一個だけ見つけた。椎名が好きな映画！」
晋作「うそ！？」
東　「はい」
晋作、東からＤＶＤを受け取り
晋作「たまにはやるじゃん」
と嬉々として肘で小突くジェスチャー。
そのあと、ＤＶＤに目を落とす。
晋作「スゴイダーマンじゃねぇかよ」
東、笑う。
晋作「返してこい」
東　「なんで、１（ワン）だよ」
晋作「関係ないよ」
東、残念そうにＤＶＤを返しに行く。
晋作「…やっぱそれも借りよう」

○大学・正門（夕）

蝉の鳴き声。

○同・講義室（夕）

後方の席に並んで座って講義を受けている晋作と東、石田。

石田「え、１どうだった？（小声）」

東　「グリルゴブリンって敵が…（小声）」

石田「もう面白いじゃん…（小声）」

晋作、呆れた顔で２人を見ている。

教員「これで前期の講義は以上となります。夏季休暇中の課題につきましては、追ってポータルの方でお知らせ致しますので…」

学生たち、ザワザワと荷物を片付ける。

○同・廊下（夕）

晋作と東、石田が歩いている。

東　「にしてもあのＤＶＤ借りてる人、相当悪趣味だよね」

晋作「スゴイダーマン？」

石田「椎名のやつでしょ？」
東　「そうそう」
晋作「何でだよ」
東　「だって、椎名がいつも借りる映画って
　昔のコアな映画ばっかりじゃん」
晋作「お前がいつも言うその昔の映画がなか
　ったら、お前の好きな今の映画だって存在
　してなかったかもしれないんだぞ。なんだ
　あれ、シャークマンだっけ？」
東　「アイ・アム・ザ・シャークね」
晋作「どっちでもいいけどね」
石田「今度続編出るらしいよ」
晋作「観ないけどね」

○同・中庭（夕）
　３人、ベンチに座って話している。
石田「椎名はなんでそんなに昔の映画が好き
　なの？　親の影響とか？」
晋作「お父さんが映画好きでさ。小さい頃に
　よく一緒に観てて、趣味が似たんだよ」

石田「映才教育だ」
晋作「あぁ、映画の映で映才教育？」
石田「そうそう。でも良かったじゃん、良い土産話できて。夏休み帰るんでしょ？」
晋作「大学入って一人暮らし始めてから実家にはしばらく帰ってない」
石田「なんで？」
晋作「なんだっていいだろ」
石田「帰りたいとは思わないの？」
晋作「別に…帰る理由がないから」
東「俺がついてってあげようか」
晋作「なんでお前が来るんだよ！」
東「息子さんを僕にくださいって」
晋作「あげるわけないだろバカが」
笑う３人。

○アパート・晋作の部屋（夜）
晋作、ベッドに寝転びスマホを触る。
久作とのメッセージを開くが、会話は途切れ途切れで数ヶ月更新がないまま。

ふと「今日から夏休み。帰ろうかな」
と打ち込むが思い止まり天井を見る。

○椎名家・リビング（回想・夜）
2年前。
高校の制服を着た晋作がソファに座り
映画を観ている。
久作の声「ただいま〜」
晋作「……」
久作、入ってくる。
久作「お、新作に備えて復習か」
と、晋作の隣に腰を下ろす。
晋作「…近い」
久作「あ〜そうそう、このシーン。ここ重要
だからよく観とくんだぞ」
晋作「…観てきたの」
久作「試写で観たけど皆泣いてたぞ。ここで
失踪したクールマスターがゼノスの前に現
れてさ、ババババって攻撃するんだけど
全く歯が立たなくて…」

と、興奮した様子で大袈裟なジェスチャーをしながらうっかり語る。

晋作「なんで言うの！？」

久作「…俺、今なんて言った？」

晋作「俺がどれだけ新作を楽しみにシリーズ追ってきたと思ってるんだよ」

久作「違う、そういうつもりじゃ…」

晋作「何が違うんだよ言い訳すんな！　ネタバレとか一番ありえないし、マジ最悪」

久作「…ごめん、悪かった」

晋作「もういい」

と、テレビを消して自室に戻る。

久作「晋作」

久作、溜息をついて鞄から映画「ストロング・ポインツ」の前売りチケットを取り出して眺める。

〇同・晋作の部屋・外（回想・夜）

久作、ドアの下からチケットを入れる。

晋作の声「…何これ」

久作「前売り券だよ。さっきは悪かった。何もお前の楽しみを奪おうと思った訳じゃないんだ。むしろお前にもっと楽しんでほしくって俺なりに魅力を伝えようと…」

晋作の声「…でも奪った」

ドアの下からチケットが返ってくる。

久作「そんなつもりじゃ」

晋作の声「死ぬんでしょ、クールマスター」

久作「死、死ぬなんて言ってないだろ！？」

と、再びチケットを入れる。

チケット、すぐ戻ってくる。

晋作の声「殆ど言ってるようなもんだよ！」

久作「じゃあなんだ？　死ぬって分かったら観るのをやめるのか」

晋作の声「…死ぬんだ」

久作「クールマスター死なない」

晋作の声「いいえ死にます」

久作「それは自分の目で確かめろ！」

と、チケットをねじ込んだあとドアの下の隙間を腕で必死に塞ぐ。

晋作の声「死ぬって分かって観ても、純粋に
楽しめないじゃんか」
久作「俺たちだっていつか死ぬって知った上
で必死に生きてるじゃないか…！」
晋作の声「やっぱ死ぬんだ」
久作「…生きとし生ける者はいつか死ぬ」
晋作、ドアを開けてクシャクシャに丸
めたチケットを久作に投げつける。
ショックを受ける、久作の顔。
扉が閉まる。
（回想終わり）

○アパート・晋作の部屋（夜）
晋作、天井を見つめたまま物憂げな顔。
ふとスマホを手に取って、打ち込んだ
久作へのメッセージを削除。
スマホを置き、眠りにつく。

○レンタルビデオ店・外観
入口の前に立つ、晋作と東。

晋作「今日はとっておきの秘策を用意した。
これでやっと、犯人の手がかりを掴める」
東　「えっ、何…？」
と、不安げに晋作を見る。
晋作、覚悟を決めて歩いていく。

○同・レジ
晋作と東、店に入ってくる。
上野「しゃいませ～」
と、暇そうにカウンターに立っている。
晋作、上野にずかずかと近付いていく。
それにトボトボとついていく東。
上野「…？」
晋作「お姉さん、映画とか…好き？」
東　「えっ、ナンパ？」
上野「ナンパですよね」
晋作「ナンパじゃない」
晋作、ポケットから映画の前売り券を
３枚取り出してカウンターに置く。
上野、それを手に取ってニヤニヤ。

東　「なんだ…。秘策って言うからどんなに
凄い作戦なんだと思ったら…買収か」
晋作「それは貴方に差し上げます。ただし」
上野「……？」

×　　×　　×

晋作と東、パソコンを触る上野を挟み
両隣に立っている。
上野「…ダメ、やっぱり出来ない」
と、キーボードから手を離す。
晋作「おっと、これもあるんだった」
ポケットからもう1枚前売り券を出し
上野の前にチラつかせる。
上野「……（ゴクリ）」
晋作、券を取ろうとする上野をかわす。
晋作「毎週何曜日の何時ごろ、誰がそれらを
借りているのか…僕らが知りたいのはただ
それだけです」
東　「僕らじゃなくて僕、でしょ？」
上野、パソコンの操作を再開する。
晋作「よ～し…良い子だ…」

上野「…ビンゴ。この人、毎週金曜日の午後
５時ごろ、合計１０本の返却とレンタルを
繰り返してる」
晋作「間違いない、そいつだ…！」
東、冷めた目で２人を見ている。
上野「あの、警察ではないですよね」
東　「えぇ違います」
晋作「全然違います」
東　「むしろ逆かも」
上野「とりあえず一旦出てもらっていいです
か…？　バレたら怒られちゃうんで」
と、２人をカウンターから追い出す。
晋作「…すみません。ちょっとやってみたか
ただけです、こういうシーンを…」
上野「分かりますけど」
晋作「あの、その人の顔覚えてますか」
上野「多分…見たら分かると思います」
晋作、犯人確保を確信したように片方
の口角を上げて東に向かって微笑む。
東　「うわダメだ完全に役に入り込んでる」

○バス停（夕）

レンタルビデオ店の反対側の道。

晋作、双眼鏡で入口を見張っている。

東　「映画の観すぎ」

東の両手にはパック牛乳とあんぱん。

晋作「お前が言うな」

東　「いや張り込みと言ったらこれでしょ」

晋作「ステレオタイプすぎない？」

東　「双眼鏡も大概だよ、貸して」

と、牛乳を渡して双眼鏡を受け取る。

晋作「いや、双眼鏡は実用的だし」

東、双眼鏡を覗き込んでいる。

東　「あっ…」

晋作「何？　見つけた？」

東　「いや、店員さんが」

晋作「紛らわしいなもう」

○双眼鏡の視点（夕）

店に入っていく小川渚（２０）と、慌てて２人を呼んでいる上野の姿。

上野「（あの人！）」
東の声「…なんか手振ってる」

○バス停（夕）
東、双眼鏡を覗きながら、上野に手を振って笑っている。
東「やっほ〜…ほら椎名も振ってあげて」
晋作「…貸せよ」
と、奪い返して覗き込む。

○レンタルビデオ店・外観（夕）
上野「来たって！　違う、手振ってない！」
と、呟いて手招きをしている。

○バス停（夕）
晋作、双眼鏡を下ろす。
晋作「呼んでんじゃねぇか！」

○レンタルビデオ店・店内・レジ（夕）
渚、会員証を出して支払いをしている。

○同・外観（夕）

上野「早く！　帰っちゃうって…！」

と、２人を呼び続けている。

○横断歩道（夕）

晋作と東、赤信号を待っている。

○レンタルビデオ店・外観（夕）

上野「も～…おっそいな…」

渚、上野の背後で店を出ていく。

上野はそれを見逃して振り返る。

慌てて入口のガラス越しに店内を確認するも、渚の姿は見当たらない。

上野「あれっ…」

晋作と東、駆け足でやってくる。

晋作「すみません、コイツが…」

上野「さっきまで中にいたんですけど…」

東、辺りをぼんやりと見渡して

東「…ん、あれじゃないの？」

と、遠くに見える渚を指さす。

上野、晋作から双眼鏡を奪って覗く。

上野「……早く！　行って！」

晋作「おい東、行くぞ！」

と、走り出す。

東　「えぇ～…また走るの？」

晋作「いいから早く…！」

東、遅れて晋作の後に続く。

○踏切（夕）

晋作と東、走ってくる。

下りていく遮断機の向こうに渚の姿。

晋作「あぁあぁあぁ…」

東　「今ならまだ通れるよ」

と、遮断機に近づく。

○商店街（夕）

晋作と東、小走りで渚を尾行しながら

角の店に隠れて様子を伺う。

道の先にはビデオ店の袋を持って歩く

渚の姿が。

晋作がタイミングを伺っていると、東がフラフラと勝手に飛び出していく。

晋作「（小声）…おい！」

と、引き止めようと飛び出す。

渚、歩きながら振り返る。

晋作と東（ダルマさんが転んだ風）に不自然にフリーズ。

渚が前に向き直ると、晋作と東も再び歩き出す。

渚が歩きながら振り返り、晋作と東がフリーズ。

渚が前に向き直り、歩き出す晋作と東。

渚、不意に立ち止まって振り返る。

渚　「あの、何なんですか」

晋作「はいっ…？」

渚　「ついてきてますよね」

晋作「いや別に…な？」

と、東に目配せ。

東　「コイツがそのＤＶＤについて聞きたいことがあるみたいで。僕は関係ないです」

晋作「おい…！」

東　「嘘つく必要ないでしょ。それちょっと見せてもらってもいいですか」

渚、大胆に近付いてくる東に少し怯え後退りをする。

東　「怪しい者じゃないんです」

渚　「それはこっちが決めます」

晋作「ちょっと…怖がってるから…！」

と、東を制止。

晋作「すみません急に…変ですよね…」

渚　「…って言うか、誰ですか」

晋作「（少し笑って）いや誰って言うか…別に誰でもないんですけど。あの…俺、椎名と申しまして…。実はその…」

渚　「椎名……？」

と、顔色を変える。

晋作「えっ…と…」

渚、晋作をまじまじと見ている。

東　「知り合い？」

晋作「いや、違うと思うけど…」

○喫茶店・店内（夕）

晋作と東、渚が対面で座っている。

机には１０枚のＤＶＤ。

気まずい沈黙。

店員「お待たせ致しました、アイスコーヒーお２つと…アイスカフェオレですね」

と、机に置く。

渚、ＤＶＤを重ねて端に寄せる。

店員「以上でよろしかったでしょうか」

晋作「…はい、ありがとうございます」

店員「ごゆっくりどうぞ」

と、その場を去る。

晋作「その映画…いつも借りてますよね？」

渚　「えぇ、はい…」

晋作「それ、全部俺が好きなやつなんです。ここ最近、毎回レンタル中になってて…」

渚、頭を下げる。

晋作「そんな、やめてくださいよ」

渚　「ごめんなさい…。ずっと借りっぱなしで独占しちゃって」

晋作「あーいえ…責めようとか全然そういうのじゃないんです」

渚　「え…？」

晋作「ただ…自分と同じ趣味の人がいるのかと思うと、ちょっと気になっちゃって…」

東、ニヤニヤしながら晋作を見る。

晋作、東を肘で小突く。

渚　「実は私の趣味ではなくって…。私の母の、思い出の映画らしいんです」

晋作「お母様の？」

渚　「学生時代、初恋の人との思い出の映画。とは言っても、母は実際に観たことがないそうなんですが」

晋作「観たことがないのに、思い出の…？」

渚　「はい…私も最初は戸惑いました。それで母に話を聞いたところ、最後にどうしても観ておきたいって言うので私が借りてたんですけど、中々観切れないみたいで…」

晋作「そうだったんですね…　（深刻に）」

東　「偶然こんなに一致するもんなんだね」

渚　「そのことで、ちょっと気になることが。
　話せば長くなるんですが…」
東　「短めでお願いできますか？」
晋作「すみません、気にしないでください」
渚　「…これは、母が高校生の頃の話です」
東　「モワモワモワ〜ン…」
　と、突然宙に雲の吹き出しを描く。
渚　「ん？」
東　「再現ＶＴＲに入りそうだったので」

○高校・教室（回想・夕）
　夕陽の差し込む放課後の教室。
　小川遥（１８）が窓辺に一人で座って
　物憂げな表情で校庭を眺めている。
　久作（１８）、入ってくる。
久作「あれ、小川さん。まだ残ってたんだ」
　久作、自分の机から忘れ物を回収して
　遥に近づく。
　遥、気まずそうに目を背ける。
（回想終わり）

○喫茶店・店内（夕）

渚　「不登校でほとんど教室にも入ったことのなかった母の名前を、その人だけは覚えてくれていたみたいで…」

晋作「その人が…？」

渚　「母の、初恋の人です」

○高校・教室（回想・夕）

久作、遥の前の席に座って話しかける。

久作「学校…、楽しかった？」

遥、無言で首を横に振る。

久作「そっかそっか…そうだよね。実は俺も、家で映画観てる方がずっと楽しく感じる…。小川さんは映画とか観る？」

遥、ゆっくり首を横に振る。

久作「映画はいいもんだよ。どんなに退屈な1日でも、一瞬で色んな世界に連れて行ってくれる。ちょうど昨日ね、良い映画観てさ！　ちょっと今から俺が再現するから」

と、立ち上がる。

遥、不思議そうに久作を見つめる。
身振り手振りで映画の再現をする久作。
渚の声「その人はいつも、好きな映画の再現をして母を笑わせていたそうなんです」
遥、思わず笑みを溢す。

○帰り道（夕）
久作と遥、歩いている。
久作「別に無理して来なくてもいいんだよ、来たい時に来ればいい。その時はまた、俺が今日みたいにバカやって笑わせるから」
遥「…ありがとう」
久作「でも、もし良かったら…今日みたいに金曜日だけでもおいでよ。まだまだ教えてあげたい映画が沢山あるんだ。次はもっと道具とか用意して、もっと楽しませるよ」
遥「…分かった」
と、微笑んで頷く。
久作「今日から毎週金曜は…映画の日だ！」
（回想終わり）

○喫茶店・店内（夕）

晋作「え…？」

渚　「それから毎週金曜日だけは、勇気を出して学校に行くようになったって…」

晋作「ちょっと待ってください、それって」

渚　「椎名さんです。椎名…久作さん。名前を聞いた時、まさかと思ったんですけど」

晋作「そのまさかですよ。間違いなく、俺のお父さんです。毎週金曜は映画の日…それが父の口癖で、小さい頃から金曜には一緒に映画を観ていたんです。その時教えてもらった映画が、まさにここにある作品で」

渚　「こんなことってあるんですね」

２人は顔を見合わせて驚いている。

渚　「母もこの話聞いたら喜ぶと思います」

晋作「（神妙な面持ちで）…お母様のことでどうか気を落とさないでください。ご回復をお祈りしています」

渚　「……へ？」

晋作「えっ」

晋作「さっき、最後にどうしても…って」

渚　「あ、あぁ～…すみません、誤解です。お父様が教えてくれた映画、配信にはないみたいで。それで、あそこが閉店する前にどうしても…ってお母さんが」

晋作「閉店！？　あそこが！？」

東、ポケットからクシャクシャに丸めた閉店の貼り紙を出す。

それを受け取り、広げて読む晋作。

東　「言ったら悲しむと思って」

晋作「……」

東　「ごめん」

晋作「なんだ…良かった…」

東　「？」

晋作「お母様、元気だったんだ…」

渚、微笑んでゆっくり頷く。

渚　「お父様は、お元気ですか？」

晋作「はい、元気だと思います…多分」

渚　「多分…？」

晋作「…」

東　「こいつしばらく実家帰ってないんです。
連絡もあまり取ってないみたいで」
渚　「…そうだったんですね。最後に今度は
本物の映画を観に行こうと約束したっきり、
お父様が突然転校することになったって…。
久しぶりに会いたがっていましたよ」
晋作「……そうだ。今度の金曜日に、皆で
映画でも観に行きませんか…？」
渚　「えっ」
晋作「お母様も誘って、皆で。近々帰ろうと
思ってたんですけど、一人だとなかなか」
渚　「ぜひ、母も喜ぶと思います」
晋作「よし、じゃあ決まり。毎週金曜は～？
映画の日だ～～……なんつって」
と、申し訳程度に拳を突き上げて弱々
しく宣言。
渚「…」
東「…」
渚、思わず吹き出すように笑う。
それにつられて笑い出す晋作と東。

○高速バス・車内

晋作と東、渚と小川遥（４８）が通路を挟んで横並びに座っている。

×　×　×

遥「高校時代の椎名君にほんとそっくり」

渚「何年前の話？」

遥「もう３０年前になるかな？　椎名君…私のこと覚えてるといいけど」

×　×　×

東「椎名、小川さんの前で猫被ってたね」

晋作「うそ、どこが」

東「だって最初、犯人見つけたら捕まえてボコボコにしてやるって言ってたじゃん」

晋作「そこまで言ってねぇよ」

ふと東の方に目をやると、隣にいる渚と遥が晋作の方をじっと見ている。

晋作「いや、ほんとに言ってないですから！こいつすぐ嘘つくんですよ」

東、眠ったふり。

晋作「おい！」

○高速道路

晋作らを乗せた高速バスが駆け抜ける。

○河川敷（夕）

夕陽に照らされた川沿いで談笑している晋作・東・渚・遥の姿。

そこに、４人を見下ろす何者かの背中。

×　　×　　×

晋作「こいつなんか、ちゃっかりあんぱんと牛乳まで持ってきてて」

東　「いや、双眼鏡も大概ですよね」

笑って話を聞いている渚と遥。

ふとこちらを見ている男の姿に気付く。

久作（４８）だ。

晋作「…お父さん…」

遥　「椎名君……！」

久作、坂を駆け降りて４人の元へ。

久作「久しぶり、晋作」

晋作「久しぶり」

と、気まずそうにはにかむ。

久作「こちらは…」

3人に目をやり、遥に気付いて二度見。

久作「えっ…！？」

遥　「久しぶり。変わってないね」

久作「小川さん…！　な、なんでここに！？

どうしたの！？　それも晋作と一緒に…」

遥　「私もまだよく分かってない」

晋作「ま、話せばそれはそれは長くなるから

また後で、ゆっくり説明するよ」

久作「で、こっちは…もしかして彼女！？」

と、渚を指す。

渚　「小川…渚です、彼女ではありません」

久作「娘さん！？　結婚なんていつの間に…

ん、小川…？」

遥　「まぁ…、今は色々あって」

久作「うちと一緒だ」

晋作「気まずいって」

久作、東の方を見る。

久作「小川何君…？」

遥、大きく笑う。

晋作「違う違う、息子さんってわけじゃない。
ただの俺の友達だから」
久作「あ…そう。ごめんごめん…」
東　「…」
遥　「今、何のお仕事してるの？」
久作「あぁ、映画の配給会社で働いてる」
遥　「椎名君らしいね」
久作「そうだ…これ、俺が描いたんだよ」
と、鞄から「アイ・アム・ザ・シャーク」のチラシを出す。
東、興奮した様子で手に取る。
東　「これって…！」
晋作「えっ…！？」
久作「日本版のポスターを手がけたんだけど
今度の続編のポスターは監督から直々に描いてほしいってオファーがきてさぁ…」
東　「凄いじゃないですか！」
久作「君、この映画好きなの？」
東　「はい、大ファンです。な」
晋作「いや俺はこういう低俗なのは…」

久作「あのなぁ、晋作。真の映画好きっても
んは、どんな映画だって愛するんだよ」
東　「そうだぞ久作…あ、晋作」
久作「久作は俺だよ」
一同、笑う。
東　「紛らわしいよ」
久作「紛らわしい言うな」

○ミニシアター・外観（夕）
年季の入った小さな映画館。

○同・館内（夕）
久作、腕時計を確認。
久作「まだもうちょっと時間あるから、トイレ行きたい人は今のうちに行っておいで」
東　「じゃ、行ってきます」
渚　「私も」
取り残される晋作と久作、遥。
遥　「…じゃ、私も行ってこようかな」
と、気を遣うようにその場を離れる。

久作「晋作は大丈夫か」
晋作「ううん、大丈夫。さっき大福食べた」
久作「さすが」
椅子に腰を下ろす２人。
微妙だった距離感が、ぐっと狭まる。
×　×　×
東、トイレから出て遠目から２人の様子を見て立ち止まる。
後から出てきた遥と渚を呼び止め、２人を邪魔しないように目線で合図。
遥「飲み物でも買っとこうか」
×　×　×
晋作「……お父さん」
久作「ん？」
晋作「なかなか帰れなくてごめん」
久作「いや、いいんだ。晋作も向こうで頑張ってるんだろ。それに、まだ映画を好きでいてくれただけで俺は嬉しいよ」
晋作「小川さんの話を聞いて、あの時ほんとに悪意なんてなかったんだなって思った」

久作「…？」

晋作「覚えてる？　俺が高校生の時、お父さんにネタバレされて怒ったこと」

久作「あぁ…。あったなぁ、そんなこと」

と、笑う。

晋作「酷いことしたなって今でも後悔してる。それが、ずっと心につっかえてた」

久作「なんだ、そんなことか。…俺の方こそ、もっと気をつけてれば良かったな」

晋作、黙って首を横に振る。

晋作「聞いたよ。映画の再現をしていつも遥さんを笑わせてたって。今思えば、本当に…ただ純粋の俺に作品の魅力を伝えようとしてくれてたんだなぁ…って」

久作「…」

晋作「これからはもっと帰ってくるからさ。毎週金曜日…とまではいかないけど、その時はまた、今日みたいに一緒に映画でも」

久作「あぁ、約束だぞ」

と、優しく微笑みかける。

晋作は照れて俯きながらはにかむ。

久作「…これでやっと、長年のわだかまりが解消されたってわけだな」

東・渚・遥の３人が、飲み物とポップコーンを手に戻ってくる。

東「すみません、お待たせしました」

東は晋作に、遥は久作に飲み物を渡す。

久作「お、気が効くね」

晋作「ありがとう」

久作「よし…じゃあ行くか」

と、立ち上がる。

遥「そういや、私たち全員まだ何を観るか分かってないんだけど…」

久作「おっとそうだった…」

と、財布から５人分のチケットを出し各々に配る（タイトルは見えない）。

渚「どんな話なんですか？」

久作「疎遠になった父と子の和解をテーマにした作品だよ」

晋作、受け取ったチケットを見て驚く。

○同・シアター前

ワクワクとした表情で会話を交わしながら、シアター内に入っていく５人。

入口横には「ラージフィッシュ　４Ｋリマスター版」と書かれたポスターが。

○同・シアター内

並んで席に座っている５人。

照明が徐々に落ち、暗闇に包まれる席。

晋作、スクリーンを真っ直ぐ見つめる久作の横顔を見る。

×　　×　　×

（フラッシュ）

映画が始まる前にふと久作（３４）の方を見る晋作（６）。

×　　×　　×

晋作は思わず笑みを溢し、前を向く。

映画が放つ鮮やかな色彩に染められていく、晋作のワクワクとした表情。

了